

優秀賞

手をつないで生きる

藤井寺市立道明寺中学校 一年 此見このみ 優那ゆうな

私が小さい頃、よく祖母宅に従弟と泊まりに行きました。祖母はご飯を作ってくれ、一日で五つの公園に行つて、遊ばせてくれました。暑い日も、祖母は根気よく私達につき合ってくれました。イオンのゲームセンターでも遊ばせてくれました。私の家にも泊まりに来てくれました。祖母との思い出はまだたくさんあり、私は祖母と遊ぶのが大好きでした。

いつからか祖母は物忘れするようになったようです。母がそれを気にして、病院に行きましたが、老化によるものとのことでした。何度か病院で受診し、脳血管性認知症と診断されるまでに二年が経過していました。そして、だんだんと祖母の物忘れがひどくなり、料理も出来なくなりました。そのため、母と私が週末に、祖母宅におかずを作って持っていきましました。しかし、冷蔵庫には、食べられない程のコロッケが、いつもあり、母はイライラしていました。私はなぜ祖母が物忘れするのか、母がイライラしているのか理由がわかりませんでした。祖母が認知症と診断されたことで、母は祖母の現状を理解し受け入れるよう心がけていました。私は初めて、そのような病気があることを知りました。認知症の人は、普通に会話できることもあり、少し話しただけでは、その人が認知症だと分かりにくいこともあります。祖母もそうでした。だから周りの人は困惑し、サポートしにくいのだと思います。

祖母をもっと理解するため、認知症について調べました。すると、「老化による物忘れと認知症との違い」がでてきました。その違いは大きかったです。老化による物忘れでは、症状の進行があまりなく、判断力も低

下せず、日常生活にも支障はないそうです。それに比べ認知症は、症状がだんだん悪化し、判断力が低下し、日常生活にも支障をきたすようです。何も分からなくなってしまうた人の気持ちはどうなのか、疑問に思い調べました。認知症の人の近くで大声で話すと「自分が悪いことをしたのか」と不安な気持ちになるそうです。そして、知っている人が近くに集まると「一人じゃない」「仲間がいる」と安心するそうです。ですが、祖母は私の名前も忘れてしまったので家族なのかどうなのか、判断できていないと思います。だから、安心してもらえるように、いつも手をつないで色々なことを話しかけています。祖母と一度手をつなぐと離してくれませんが、それは、安心して証なのだと思うと、とてもうれしいです。認知症になっても祖母の笑顔はたえません。会話は出来なくなっても、滑舌よく、たくさん話します。私はその話を聞くのが、とても楽しいです。

認知症は「身近な病気」なのかもしれません。出会うのが少ないのは、ほとんどの認知症の方が、施設に入っているからだと思います。日本は高齢化に伴い、認知症に罹患する高齢者が増加すると考えられます。施設に入れる人数も限られているため、地域で暮らす認知症の方もいると思います。そのような人やサポートする家族が安心して暮らせるように、理解の輪が広がるといいと思います。相手を知り、自分と置き換えて物事を考え、関わるようにしたいです。

時々、「もし祖母が認知症にならなかつたら」と考えます。祖母とやりたいことは、今でも、弟・従弟と一緒に祖母宅に泊まり、公園に遊びに行くことです。たくさんの楽しい思い出を認知症という病気に奪われているようで、とても寂しいです。それでも、ふいに私の名前を口にするのがあり、前の祖母に戻ったようで、とてもうれしくなります。祖母は忘れても、笑顔で楽しく過ごした日々ことは、私が覚えています。その思い出を忘れず、これからも祖母と手をつないでいきたいです。